

表現活動の充実と評価について

これまでの評価は、中間考査や期末考査などの筆記試験を用いて行うことが一般的であった。この評価法は「言語や文化についての知識・理解」の観点の評価するには適したものであるが、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」や「表現の能力」を評価するには不十分である。今回の取組では、音読テストや暗唱テスト、スピーチ、観光案内パンフレット作成、俳句づくり等の表現活動を指導に盛り込み、「表現の能力」の観点を中心に評価した。

従来の学習観は、「将来、英語が必要になるから学んでおこう」という“just-in-case learning”であり、教科書を見ながらテープを聞いて発音したり、課題にそって作文したり、表現を覚えたりするドリル学習からなる「個人的な作業」が主に行われてきた。指導事例では「必要になったときにそれに即応して学ぶ」といった“just-in-time learning”の考え方や、必然性のある表現活動、さらにペアワーク、グループワークからなる「共同学習」を取り入れるよう工夫した。

評価の点では、これまで「身に付けたこと」を評価し、どれだけ知識が頭に入っているかを定期考査等で測定することが中心であったが、指導事例では「できる(できた)こと」「成し遂げた過程」を評価し、英語使用能力を測定することを目指して授業実践に取り組んだ。

1 単元・プロジェクトの指導計画の作成

指導計画には、「3年間あるいは1年間の授業を通して、最終的にどのような力をもつ生徒を育てたいのか」という長期的な指導計画・目標(ビジョン)を設定することが重要である。今回の事例では、各単元の指導計画を中心に、単元の枠を越えたプロジェクトの指導計画、単元の中に位置づけられた表現活動の指導過程を作成した。なお、複数の科目・単元を扱った指導事例(1)では各単元の指導計画を省略した。

今回の事例では、まず、単元・プロジェクトの目標を設定した。次に、平成15年9月に国立教育政策研究所が発表した「高等学校における評価規準、評価方法等の研究開発について」を参考に、各学校の生徒の実態を考慮して、単元の目標に準拠した評価規準を作成した。また、その評価規準と評価方法(ワークシート、観察、音読テスト等)との関連を示した。

2 表現活動について

田中武夫(2003)は、表現意欲を高めるポイントとして、必然性(生徒が表現したいと思うような場面や状況を作り出すこと)、具体性(事前に活動の例や評価のポイントを提示し、生徒に活動内容を具体的にイメージさせて取り組ませること)、自己関連性(生徒自身のことや身近で親しみやすい事柄を扱うこと)、自由度(生徒自身の意志や判断で自由に表現させること)の4つをあげている。今回の取組では、この4点に加え、共同学習を取り入れた表現活動の工夫を目指した。

3 評価ポイントの作成

表現活動における評価の目的は、人から評価されたことを自分で振り返り、表現内容を良いものにし、表現力を高めることである。それには何が評価されるのか生徒に前もって具体的に知らせること、そして何が評価されたのか生徒に具体的に知らせることが必要である。そこで、単元の評価規準に基づいて表現活動ごとに、より具体的な評価ポイントを作成し、「この活動を通して、どのような生徒に育ってほしいのか」、「この活動を行う中で、生徒にどのような力を身につけてほしいのか」をできるだけ具体的に生徒に示すことにした。

4 評価ポイントで何を評価するのか

コミュニケーション能力の構成要素として、カナル(Canale, 1983)は、文法能力(相手に伝えたいことを正確に表現できる力)、談話能力(話の展開や文章の構成を理解して伝えたいことを一貫してまとめて表現する力)、社会言語能力(場面や相手との関係を理解して適切に表現できる力)、方

略能力（行き詰まったときなんとかして表現できる力）をあげている。また、これら4つの言語的な要素の他に、アイコンタクトのとり方、ジェスチャーの使い方、表情などの非言語的な要素も重要であろう。

国立教育政策研究所の発表した評価規準も、この構成要素に即して作られている（松浦，2002 参考）。英語 の評価規準にある「関心・意欲・態度」の中の〔言語活動への取組〕は、非言語的な要素に該当し、〔コミュニケーションの継続〕は方略能力を表している。「表現の能力」にある〔正確な音読・発話・筆記〕や、「理解の能力」にある〔正確な聞き取り・読み取り〕は文法能力を指している。また、「表現の能力」の〔適切な音読・発話・筆記〕や、「理解の能力」の〔適切な聞き取り・読み取り〕は談話能力と社会言語能力に相当する（松浦，2002）。以上の評価規準に加えて、今回の取組の評価ポイントでは、表現の内容そのものである個性豊かな表現内容とその量にも着目した。

5 自己評価と相互評価

自己評価では、表現活動の後、活動内容や作品を振り返ったりして客観的に自分自身を見つめ直すことが重要である。目標にどれくらい到達したか、どれくらい成長したかを生徒に気づかせ達成感・成就感をもたせることが重要になる。そのことが、次の活動ではこうしてみたいという学習意欲の喚起に結びつくことになる。

相互評価では、級友に評価されることで発表者に真剣味が増し、聞き手側も手が抜けず積極的に表現活動に参加できる利点がある。また、級友の考えていることが理解できるので、生徒の間に相互理解・信頼関係を培うことができる。また、この相互理解・信頼関係こそが自己表現活動をより活発にする重要な要素になる。そこで、今回の取組では、表現活動の直後に自己評価、相互評価をできるだけ取り入れた。

6 定期考査における評価問題の作成

定期考査の出題方針やポイントを事前に公開し、授業中の活動を考査に盛り込むよう工夫し、指導効果が検証できるようにした。また、答えが一つとは限らない評価問題を工夫した。

7 今回の取組を振り返って

指導と評価の一体化を目指したが、実際は形成的な評価をタイムリーに実施し、次の指導へ活かす段階までは到達できずに終わった。また、普段の授業において観察やポートフォリオ評価を行ったが、生徒の内面的な成長を評価することはできなかった。しかし、今回の4つの指導事例のそれぞれの最後に書かれているアンケートの結果から生徒の感想を読み取ると、今まで軽視されがちであった「表現の能力」を高める言語活動は、生徒の学習意欲を喚起していることがわかった。自己評価・相互評価と共に表現活動を共同学習という形で取り入れることは、英語授業のさらなる活性化へとつながっていくものと考えられる。

「3年間の英語授業を通して、どのような生徒を育てたいのか」といった長期的なビジョンを、各学校の教育目標に基づいて設定することが、今後、必要になってくると思われる。生徒の発達段階やコース選択・文理選択等の進路指導の時期、さらには修学旅行等の学校行事の時期に応じて、いつ、どのような授業を行い、その中にどのような言語活動（表現活動）を盛り込み、タイムリーに評価していくかが、今後の課題であろう。

<参考文献>

- ・国立教育政策研究所「高等学校における評価規準、評価方法等の研究開発について」
(2003年9月)
- ・松浦伸和「外国語における新しい評価の在り方と評価方法の改善」(2002年7月 中等教育資料)
- ・田中武夫他「自己表現活動を取り入れた英語授業」(2003年 大修館書店)
- ・杉本卓・朝尾幸次郎「インターネットを活かした英語教育」(2002年 大修館書店)